The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	レ枢機卿の英雄像 ： 『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』を例に
Author(s)	涌井, 萌子
Citation	Gallia. 2023, 62, p. 3-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

レ枢機卿の英雄像
――『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』を例に[1)]――

涌井　萌子

レ枢機卿のレトリック研究では、18歳の作である『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀[2)]』以降、『メモワール』に至るまで、作中で描かれる理想的な人物像に共通して、勇気や高邁さに満ちた行動的な「英雄 héros」が見られることが指摘されてきた[3)]。先行研究において、『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』とは、愛読書であるプルタルコス『対比列伝[4)]』のような英雄神話であると考えられ、主人公フィエスク伯は、枢機卿就任前の10代のレが抱いていた「偉大さ grandeur」への熱意と呼応しており、彼の理想的「英雄」が受肉した姿と捉えられている。

『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』をプレイヤッド版の最初の作品に置く理由として、作品の執筆年代の他に、「フロンド参加者、政治的モラリスト、メモワール作家の誕生を明らかにするもの[5)]」であることが挙げられるように、この作品がレ枢機卿の政治道徳やレトリックを理解する入り口となることは共有されてきた。しかし、レ枢機卿の先行研究で扱われる『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』は、あくまで『メモワール』を題材としたレトリック研究の参照作品としか扱われず、全集の作品紹介以外に、本作が主たるコーパスとして分析や考察が行われることは極めて少ない。しかし、レ枢機卿の理想像がラヴァーニュ伯ジャン＝ルイ・ド・フィエスクという人物として明らかに現れるテクストであることの他に、10代後半に書かれた本作ではイエズス会教育や当時の流行であったコルネイユの英雄などの影響なども指摘されることから、本作について独立した分析を行うことには意義がある。

1）本稿は第88回大阪大学フランス語フランス文学会（2022年3月）での口頭発表「レ枢機卿の英雄観――寛容 magnanimité をめぐって――」に、大幅な加筆訂正を加えたものである。

2）本稿で扱うのは1665年版であり、引用にあたっては最新版の全集である Cardinal de Retz, *La Conjuration du Comte Jean-Louis de Fiesque*, dans *Œuvres complètes*, éd. Jacques Delon, tome VII, Paris, Honoré Champion, 2011. を参照する。引用においては「*OC*」と略号を用い、作品名，巻番号，ページ数を以下のように示す。（例 *OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 117）仏語からの引用に関しては断りのない限りすべて拙訳を用いる。また、イタリア語ではフィエスコ Fiesco、英語ではフィエスキ Fieschi であるが、ここではフランス語で書かれたレ枢機卿による作品を元にしているためフィエスク Fiesque とする。この他の地名、人名も日本語訳にあたってはフランス語表記に基づく。

3）André Bertière, *Le Cardinal de Retz mémorialiste*, Paris, Klincksieck, 2005, p. 323.

4）レ枢機卿の英雄への傾倒に多くの影響を与えた読書経験は、イエズス会教育によるものだとされている。（Jacques Delon, *Le Cardinal de Retz : orateur*, Paris, Diffusion, 1989, p. 65.）

5）Cardinal de Retz, *Mémoires : la conjuration du comte Jean-Louis de Fiesque, Pamphlets*, textes présentés et annotés par Maurice Allem et Edith Thomas, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1956, p. 1110, «Les sources et leur hiérarchie», par Marie-Thérèse Hipp.

フィエスク伯の物語の中では、反乱を起こすべきか否かで逡巡する様子が見られ、実際の軍事行動に至るまでに十分に紙面を割いて、フィエスク伯が熟考する姿が描かれている。意見を求めた腹心の部下2人から2種類の対照的な英雄的行動が示され、彼が双方に理解を示した上で「生来の性質 le naturel」に沿った行動が選択されるという経過を辿る。

そこで本稿では、『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』という作品について概説した後に、2人の建言者が示す英雄的行動の比較を行う。それぞれの性質を分析した上で、最終的にフィエスク伯の選択の最大の理由となる「生来の性質 naturel」について整理し、レ枢機卿における英雄とはどのような人物を指すのかを明らかにすることを目指す。

『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』

レ枢機卿の最初の作品であり、『メモワール』内の言及では1639年の初期に書かれたとされており[6)]、1665年に匿名出版された。本作は1629年に出版されたイタリア人のアゴスティーノ・マスカルディの著書『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』の翻訳を参照して執筆されたものであり[7)]、ジェノヴァ共和国の四大貴族であるフィエスク家当主ラヴァーニュ伯ジャン＝ルイ・ド・フィエスクがドリア家に対して1547年に起こした反乱を元にしている。

作品では、まず四大貴族の一つであるドリア家に対して反乱を起こした背景について、15世紀末から続くイタリア戦争の影響を中心に、ジェノヴァとフランス、スペイン、神聖ローマ帝国との関係が説明され、ドリア家に権力が集中する過程とジェノヴァの貴族および市民の状況が述べられる。その後、計画段階、反乱勃発とフィエスク伯の死による計画の頓挫、反乱終結後の反逆者の処遇とジェノヴァの様子が描かれる。そして最後に、「ここでやめておこう。この素晴らしい計画の実行のために何が起こったのか、具体的に考察してみよう[8)]」と述べた後、「私 je」によるフィエスク伯と反乱に関わった人々の評価、そして反乱の計画と実行の手順の評価が行われる。

作品全体の傾向として、先行研究では、川の氾濫、雷鳴、嵐の海での航海、嵐に巻き込まれた船などのバロック趣味のイメージが見られ、また、明言されてい

6）1639年出版のブシャールによる翻訳との類似が随所で見られることから、この執筆年代には疑問が生じる。

7）Jean-Jaques Bouchard, *La Conjuration du comte de Fiesque traduite de l'italien du Sgr Mascardi, par le Sr de Fontenai Ste Geneviève et dédiée à monseigneur l'éminentissime cardinal duc de Richelieu. Avec un recueil de vers à la loüange de son éminence ducal*, Paris, Jean Camusat, 1639, 2 parties en 1vol, in-8°, 260p. ジャン＝ジャック・ブシャールがフォンテ・サント・ジュヌヴィエーヴの聖職者というペンネームで翻訳したもので、フランス語でフィエスク伯の反乱という史実について書かれた最初の作品である。作品については、同様に参照したと考えられるジャック＝オーギュスト・ド・トゥーの『現代史』のフランス語訳と共にレ枢機卿作品全集に付属資料として掲載されている。（Mascardi, *La Conjuration du Comte Jean-Louis de Fiesque*, traduite de l'italien par Bouchard, 1639, dans *OC*, éd. Jacques Delon, tome VII, Paris, Honoré Champion, 2011, p. 258-316.）

8）*OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 170.

ないものの、マキャヴェリ思想の介入が指摘されている[9]。さらに、『メモワール』に指摘される、史実をフィクションに変えようとするレ枢機卿の傾向が『フィエスク伯』の時点で見られる[10]。フィエスク伯に対する評価について、レ枢機卿は「私 je」として物語に頻繁に登場し、「数人の歴史家 quelques historiens」の批判に対して真っ向から反対する姿勢をとっている。その差異が最も顕著に現れるのは、フィエスク伯の死のシーンである[11]。フィエスク伯は反乱の中で、ガレー船に乗り込む際に桟橋で橋を踏み外して海に落ち溺死するのだが、マスカルディが「海の水よりも、汚くて臭い泥の中で窒息」したことによる惨めな死であり、この死は神罰であると描写する[12]。その一方で、レ枢機卿は、身につけていた武具の重さと、海泥に足を取られたことによって浮き上がれずに溺死したと単に描写するにとどめ、フィエスク伯の名声は「より長い人生と栄光を手に入れるためのより正当な機会[13]」以外の全てが揃っていたと評価している。

この他にも作品の至る所で「歴史家」の評価に対して反駁する記述が見られ[14]、史実を単に説明するのではなく、ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵を偉大な英雄として賞賛することに関心があることがわかる。次節では、フィエスク伯の行動に関する描写をもとに、レ枢機卿における英雄とはどのような人物を指すのか具体的に見ていく。

『フィエスク伯』における２種類の英雄像

フィエスク伯は、ジェノヴァの実質的な支配者であるドリア家の専横を挫くために反乱を起こすが、反乱を決意するまでに半年近く時間をかけている。その中で、「友人に相談することなく、この重要なことを結論づけるべきではないと考え」、信頼していた３人の友人たちを呼び、彼らに意見を求める[15]。

そのうちの２人、ヴァンサン・カルカーニョとヴェリナが直接話法による意見の陳述を行う。「判断力のある人物だが、かなり臆病な精神を持つ[16]」カルカーニョは反乱を思い止まらせようとし、「気性が荒く、偉大なことに傾倒」するヴェリナ

9）Cardinal de Retz, *Mémoires : la conjuration du comte Jean-Louis de Fiesque, Pamphlets*, *op.cit.*, p. 1104, « Les sources imprimées », par Marie-Thérèse Hipp.

10）嶋中博章『太陽王時代のメモワール作者たち：政治・文学・歴史記述』、吉田書店、2014 年、p. 98-121.

11）この歴史記述の虚構性はレ枢機卿に指摘されると同時に、「歴史家」とされるマスカルディが歴史書として執筆している『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』にも指摘されるものである。マスカルディの著作にも頻繁に「私」が登場し、フィエスクの反乱をドリア家によってもたらされた「ジェノヴァ人が取り戻したばかりの自由を危険に晒す、非常に奇妙な事件」（Mascardi, *La Conjuration du Comte Jean-Louis de Fiesque*, dans *OC*, p. 263.）として描くことを目的に、陰謀と主導者のフィエスク伯爵を激しく非難する主観的な評価が介入する。

12）*Ibid.*, p. 302-303.

13）*OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 173.

14）*Ibid.*, p. 130, 159, 170, 173.

15）*Ibid.*, p. 131. フィエスク伯と直接比較されるジャネッティン・ドリアとは、有能で信頼のおける部下に恵まれているかどうかという点で相違が見られる。党派構成員の能力と党首の能力とを同一視する考えは、レ枢機卿のマザリナードにも見られ、党派のシャヴィニー卿の無能を攻撃することで間接的にコンデ親王を攻撃している。

16）*Ibid.*, p. 138

は推し進めようとするという、対照的な登場人物である[17]。

両者はほとんど[18]同じ主題について扱っており、それぞれの主題についての意見が対照的であることが、両者を全く異なる結論に導いている。2人の建言者が扱うトピックはジェノヴァの市民や貴族の現状に対する分析、ドリアの横暴に対する神罰の期待、フィエスク自身の生まれ持った財産や地位と行動との関係である。

(1) ジェノヴァ市民・貴族の現状

フィエスク伯を思い止まらせることを目的としたカルカーニョは、ジェノヴァに住む人々の状況を悲観し、伯爵に訴えかける。

> ドリア家が多くの貴族たちに与える海の上の仕事によって、最も多くの貴族をドリア家の利益に引きつけていることや、神聖ローマ帝国とスペインの好意のおかげで残り全ての貴族を恐れさせていることが少しも分からないのですか？ジェノヴァ人は皆、ある深い麻痺状態に沈み込んでいること、無気力でない人々は、彼らがこの強大な力（ドリア家の権力）を崇拝しないのであれば、屈従することは少しも破廉恥だと思っていないということが分からないのですか？[19]（*OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 134.）

ジェノヴァ市民は自発的隷属状態であり、ドリア家と利害を共有する多くの貴族たちがドリア家に反旗を翻す見込みは極めて低いとのべる。カルカーニョは保身と自己愛に満ちた人間を描き、協力は期待できないことを強調する。

> 彼ら（他者）の利益を見てください。ほとんど全ての人々を動かすものはそれであり、あなたを尊敬し、あなたを愛する人の大多数があなたの栄華を願うよりも、自分自身を一千倍も愛しており、自らの破滅を遥かに恐れていると考えてください[20]。（*Ibid.*, p. 134.）

17）ごく僅かながら両者には共通点が見られ、ジェノヴァ市民がドリア家の圧政に対して「深い麻痺 une profonde léthargie」に陥り、置かれている隷属状態に無感覚であること、反乱を起こすのであれば、傭兵として外国人（特にフランス人）を使わないことである。

18）唯一異なるのは、カルカーニョは、反乱が仮に成功した場合のジェノヴァについて言及し、市街戦により荒廃した街の統治や、叛逆者が統治者となることに対する民衆の反応などを問うのに対して、ヴェリナはあくまで反乱それ自体を目的としているため、反乱後については具体的な言及がないという点である。

19）« Ne voyez-vous point que la maison de Doria attache à ses intérêts la meilleure partie de la noblesse par les emplois qu'elle lui donne sur la mer, et qu'à la faveur de l'Empire et de l'Espagne, elle tient tout le reste dans la crainte ? Ne voyez-vous pas, dis-je, que tous les Génois sont comme ensevelis dans une profonde léthargie, et que les moins lâches ne croient point qu'il soit déshonnête de céder à cette haute puissance, pourvu qu'ils ne l'adorent pas. »

20）« Regardez leurs intérêts : songez que c'est ce qui fait agir presque tous les hommes, que la plupart de ceux qui vous estiment et qui vous aiment s'aiment encore mille fois mieux et craignent beaucoup plus leur perte qu'ils ne souhaitent votre grandeur »

フィエスク伯のために利害を考えずに協力する人間はほとんどいないと考えられ、ジェノヴァでドリア家に反乱を起こしたところで勝算は低いことが示される。慎重論においてフィエスク伯に勧められる行動とは、現状を悲観的に考察した上で、現実的な打開策を模索するものであることがわかる。

一方、積極論者であるヴェリナは、現状を楽観的に考察している。

> この国の健康状態はまだ全ての構成員が腐敗するほどまでには絶望的ではありません。[...] 私たちの共和国が今ある状態は、大病の性質によるもので、その病気がもたらす衰弱にもかかわらず、病人の心には治療に対する激しい欲望が沸き起こるのです。ドリアの不当な支配に苦しむ全ての民衆の願いに応えてください。ジェノヴァ人全員に共通する不幸を密かに嘆いている、貴族の最も正常な一部の人々の声を支援してください[21]。(*Ibid.*, p. 138.)

ヴェリナはこのように、民衆はドリアの支配に無感覚になっておらず、また、貴族の一部にもまだ反抗の意思を持つものが残っており、フィエスク伯が反乱を起こせば、呼応する住民が存在することを述べている。

ここではジェノヴァ市民は被害者であり、不幸を嘆く貴族も含めてフィエスク伯が救うべき対象として描写されるが、ジェノヴァ住民全体に占める割合は定かではない。行動の実現性は議論されず、あくまで目的が先行しており、救世主としての理想的英雄像ありきの行動が提案されている。

(2) ドリアの横暴に対する神罰の期待

カルカーニョは、ここまで抵抗なしに権力を得てきたドリア家が、遠からず陥るであろう挫折について述べることで、フィエスク伯を制止しようと試みる。

> 神から救済策を期待してください。神が気にいるように国家の変化を行い、この共和国に対して決して思いやりを欠くことはないでしょう。[...] 何の苦労もなく傑出した段階に登っていくこのような運勢は、ほとんど常に自ら崩壊します。なぜなら、傑出した段階に登るための自分自身の野心や資質を持っている人は、通常、その段階で自分自身を維持するために持たなければならない野心や資質を持っていないからです[22]。

---

21) « Néanmoins la santé de cette république n'est pas encore désespérée jusques au point que tous ses membres soient corrompus, [...] L'état où est la nôtre tient de la nature de ces grandes maladies qui, malgré l'abattement qu'elles causent, excitent, dans l'esprit des malades, de violents désirs pour la guérison. Répondez aux souhaits de tout le peuple, qui gémit sous l'injuste autorité de Doria ; secondez les vœux de la plus saine partie de la noblesse, qui déplore en secret le malheur commun de tous les Génois »

22) « attendez-les[= les remèdes] de la Providence, qui dispose, comme il lui plait, du changement des États et qui ne manquera jamais à cette république [...] Ces fortunes qui s'élèvent sans peine à des degrés éminents tombent presque toujours d'elles-mêmes, parce que ceux qui ont l'ambition et les qualités propres pour y monter, n'ont pas d'ordinaire celles qu'il faut avoir pour s'y soutenir »

（*OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 135.）

フィエスク伯が反乱を起こさずとも、待っていればドリアは自滅するという考えである。もう１人の助言者であるヴェリナが即効性を強調するに対し、慎重さを重視するカルカーニョの意見は全体として待つことを勧めるという特徴がある。

一方で、慎重なカルカーニョの意見について「偉大な人々の精神を汚染するこの臆病な格言[23]」と一蹴し、「神が常に悪人たちを罰するとは限らない」として以下のように述べる。

> 善人を楽しませ、抑圧しようとするものの暴力から善人を守るために、適切なタイミングで、神が常に悪人たちを罰するとは限りません。政治よりも誤りを犯さない自然 la nature[24] は、わたしたちを脅かす悪に先回りすることを教えています。慎重さが対策を決めている間に、悪は不治のものになってしまいます[25]。（*Ibid.*, p. 143.）

神罰は期待できず、できたとしても時間がかかりすぎるという意見である。そのため、ジェノヴァ人とジェノヴァ共和国の救済のために立ち上がるべきだとフィエスクに蜂起を促す。

⑶　生まれ持った財産や地位と行動の関係

フィエスク伯に薦める態度や行動について、慎重論と積極論と対照的な２人の建言者だが、その違いの原因となっているのが、生来の財産や地位に対する考え方に関する両者の相違である。

> あなたの生まれがあなたに与える安息と利益を平和的に享受してください[26]。（*OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 134.）

現在持っている財産を重視し、生来の財産や地位は守るべきものとして提示される。その根拠として、カルカーニョは、フィエスク伯を「一個人 un particulier[27]」とし、ドリア家の支配や権力の強大さと比較し弱小であるために、現状変更をしようとする試みは失敗すると考えているからである[28]。そのため、栄光や偉大ばか

23）*Ibid.*, p. 139.
24）ここで示される「自然 la nature」は具体的にどのような性質を持つものか説明されない。あくまで人間が従うべき重要な規範として示されるのみである。
25）«le Ciel enfin ne punit pas toujours les méchants, à point nommé, pour réjouir les bons et les garantir de la violence de ceux qui les veulent opprimer. La nature, plus infaillible que la politique, nous enseigne d'aller au-devant du mal qui nous menace ; il devient incurable pendant que la prudence délibère sur les remèdes»
26）«jouissez paisiblement du repos et des avantages que votre naissance vous donne»
27）本作では「一個人 un particulier」とは、「君主 un souverain」の対義語とされている。（*Ibid.*, p. 172.）
28）*Ibid.*, p. 134.

りを夢想させる「野心 ambition[29]」を制御し、「不確かな希望を追いかけるために確かな利益を横転させる[30]」ことないよう、懇願する。

一方で現状に留まろうとするこの態度は、自己保身に終始し、公益性に欠けるとヴェリナに批判される。

> あなたのような、巧みで有徳であり、質の高い人間の行動が、全てに耐える決意をするのか、ドリアの横暴の圧政を払い除けるために全てのものを危険に晒すことで外国の勢力の奴隷になる必要なく自らを危険に晒すのか、あるいは今まで通り、個人の財産の範囲内に自らを留めたままでいるのか、判断してください[31]。(*Ibid.*, p. 146.)

ヴェリナはフィエスク伯を「非凡なことを成すために生まれてきた[32]」存在であり、一般大衆の「卑しさ bassesse[33]」を繰り返し述べることによって、フィエスク伯の生まれ持った資質や価値の高さを際立たせる狙いがある。

> あなたは、この全体的な卑しさ cette bassesse générale に陥ることなく、あなたの輝かしい生まれがあなたに抱かせるこれらの高貴な感情を持ち続け、あなたの心はあなたの価値に相応しい計画を形成しているのです。このような立派な資質をおろそかにしてはいけません。生来の境遇 la nature があなたに与えた恩恵を濫用してはいけません。あなたの祖国に仕えてください。あなたの性質の素晴らしさによって、あなたの性質が生み出しうる行動の偉大さを判断してください[34]。(*Ibid.*, p. 139-140.)

---

29) カルカーニョは、共和政ローマで国家転覆陰謀事件を起こしたルキウス・セルギウス・カティリナを例に出し、野心の行き過ぎは大罪を生むということ、フィエスク伯を「ジェノヴァのカティリナ」にするよう促しているのも野心だということを諫言している。(*Ibid.*, p. 137.)

30) *Ibid.*, p. 136-137.

31) «Jugez enfin si c'est le parti d'un homme habile, de mérite et de qualité comme vous êtes, de se résoudre à tout souffrir et d'être la victime de l'insolence de Doria, ou bien, en hasardant toutes choses pour secouer le joug de sa tyrannie, de vous exposer sans besoin à devenir l'esclave d'une puissance étrangère et de vous renfermer comme auparavant dans les bornes de la fortune d'un particulier.»

32) *Ibid.*, p. 139. カルカーニョの演説内に「非凡な extraordinaire」という語は登場しない。ヴェリナは「非凡な行動において、不利な状況を見抜く臆病な慎重さの冷静な考察よりも活力と大胆さが常に必要とされる」と考えている。(*Ibid.*, p. 140.)

33) *Ibid.*, p. 139 et 142. カルカーニョの演説内に、この語は登場しない。フィエスク伯が溺死した後、兄弟たちが計画を頓挫させてしまった経過を、フィエスク伯の計画立案と実行を「人間の勇気と行動の傑作」とするのに対して、「その余波において私たちの本性の卑しさと不完全さ la bassesse et l'imperfection de notre nature がもたらす一般的な影響に満ちている」とし、兄弟だけでなく読者・著者を含めた「我々 nous」との違いを強調している。(*Ibid.*, p. 170.)

34) «cependant vous ne tombez point dans cette bassesse générale, vous soutenez ces nobles sentiments que votre illustre naissance vous inspire, et votre esprit forme des entreprises dignes de votre valeur. Ne négligez donc point ces qualités admirables, n'abusez pas des grâces que la nature vous a faites, servez votre patrie, jugez par la beauté de vos inclinations de la grandeur des actions qu'elles peuvent produire»

さて、ここまでの両者の相違を小括すると、二者間で「見合う、値する méritér」の意味が大きく異なることがわかる。

慎重論を推すカルカーニョが述べる地位や財産に見合った行為とは、あくまでフィエスク伯を含めた人間の卑小さが前提にあるため、現状から大きく外れることはない範疇の中に留まるものである。しかし、一見取るべき行動は自明ではあるものの、民衆や貴族といった周辺の現状を把握した上で時宜を待ち、見極めることを求めるため、変則的と言える。一方のフィエスク伯を他から一線を画す存在と見なすヴェリナの積極論においては、行動は生来の地位や価値から生じるものである。予め与えられた価値から、何をするのかで付加価値を与えていくことを求めるため、行動に選択の余地はあるものの、その選択が民衆の状況や現況に対する分析を踏まえたものではなく、予め与えられた理想的英雄像によって規定されているということができる。

「生来の性質 le naturel」に沿った行動

前述の対照的な二者の意見に加え、第三の建言者でありカルカーニョの慎重論に与するサッコの意見を聞いた後、フィエスク伯爵はヴェリナの推す積極論を採用する。この採用理由について、レ枢機卿は作者の視点から以下のように述べている。

> その理由は彼が常に栄光に対して抱いていた生来の傾向 l'inclination naturelle や、名誉ある行為であれば彼にとってどんなことも困難と感じないこの偉大な魂に沿ったものだったからだ[35]。（*OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 148.）

「彼がなぜその行動を取ったのか」という問いに対する答えは、単純に「彼がそのように生まれたから」ということでしかない。結局のところ、二者択一の中で一方を選択しているように見えるものの、2 人の助言者の間での中立は外見に留まり、結論は既に与えられていたのである。

この「生来の naturel/le」という形容詞や「生来の性格 naturel」という語は頻繁に作品内に登場する。以下は、フィエスク伯が反乱を起こした原因についての記述である。

> もしもフィエスク伯爵の生来の性格 le naturel がドリア家の権威によって栄光への道 le chemin de la gloire が阻害されていると知ることがなければ、確実にもっと節度のある行動の範囲内にとどまっただろう[36]。（*Ibid.*, p. 126.）

35）« parce qu'elles [= les raisons de Verrina] étaient conformes à l'inclination naturelle qu'il avait toujours eue pour la gloire, et à cette grandeur d'âme qui faisait qu'aucune chose ne lui paraissait difficile pourvu qu'elle fût honorable »

36）« si le naturel du comte de Fiesque n'eût point trouvé le chemin de la gloire traversé par l'autorité des Doria, il fût assurément demeuré dans les bornes d'une conduite plus modérée »

フィエスク伯は「大河 grand fleuve」に喩えられ、ドリア家はその流れを阻害する「障害物 digue」と見做され、反乱は障害物によって流れが乱されたことによる洪水と喩えられている。このことから反乱を起こした要因は専横を極めるドリア家そのものにあり、名誉欲を満たす機会に恵まれなかったこととされている。

反乱を唆す周囲の人々[37]もフィエスク伯の「生来の性格」を把握し、自尊心をくすぐるように彼に声をかける。教皇パウロ3世は「ジャン＝ルイ・ド・フィエスクの野心を注意深く育てることに努力を傾け[38]」、反乱推進派は「常軌を逸しているわけでも、不可能なわけでもない[39]」と説得することによって、計画実行へと駆り立てる[40]。

計画の実行段階においても、フィエスク伯は「生来の性質」を意図的に見せることに配慮する。

> さらに、彼（フィエスク伯）は名声を得ることに並々ならぬ意欲を持ち、その名声を高める大いなる巧みさを持っていたので、彼は人々が彼に指摘した全ての偉大な資質が、念入りに考えられた行為 conduite étudiée からではなく、彼の生来の性質の底 fonds de son naturel からくるように見えるやり方で生きた[41]。（*Ibid.*, p. 149.）

自己演出にあたって、偉大さが作為的なものではなく、フィエスク伯の人間性から生じるものであることが重要であり、態度の決定だけでなく、その後の行動規範についても「生来の性質 le naturel」が重視されていることがわかる。

おわりに　『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』再考の意義

本稿では、『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』における英雄の性質について、2人の建言者が示す英雄的行動の比較を行った後、フィエスク伯の行動

37）マスカルディの『フィエスク伯』では蜂起を促す人物の中にフィエスク伯の母が含まれており、母親は「芽生えた火に薪をくべることを怠ら」ず、「息子の精神と勇気を、鋭くくすぐる言葉で刺激」する。一方、レ枢機卿の『フィエスク伯』には母親は全く登場しない。（Mascardi, *La Conjuration du Comte Jean-Louis de Fiesque*, dans *OC*, p. 270.）

38）*OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 127.　フィエスク伯の反乱を支援し、神聖ローマ帝国と同盟関係にあるドリア家を破滅させることは、イタリアで勢力を拡大する神聖ローマ帝国の影響力を弱めるという点において、ローマ教皇にメリットがあった。

39）*Idem*.　レ枢機卿は『メモワール』において、不可能と非凡とを区別し、非凡であるが可能である行動を、不可能で常軌を逸した行動と分別することを「英雄的な判断力 le jugement héroïque」と呼んでいる。（*OC*, *Mémoires*, tome VIII, p. 342.）

40）行動の決定づける「栄光 gloire」を求める生来の性質は、作品の中で繰り返し述べられており、「栄光を熱烈に求めていたが、栄光を得る機会を欠いていたので、機会を生む方法だけを考えていた」とされる。カルカーニョがその機会を「外国との戦争」に求めるよう進言していることからも、「栄光」とは戦いにおける勝利に負っていることがわかり、コルネイユ劇における「栄光」との類似が指摘される。（村瀬延哉、Irina Tolstoguzova「『ル・シッド』の語彙－«Gloire» と «générosité» を中心に－」『欧米文化研究』、広島大学大学院社会科学研究科、12号、2005年、p. 31-46.）

41）«et, comme il avait de lui-même une ardeur incroyable pour la gloire et beaucoup d'adresse pour accroître sa réputation, il vivait de manière que toutes les grandes qualités que l'on remarquait en lui paraissaient venir du fonds de son naturel et non pas d'une conduite étudié»

を決定づける「生来の性質 le naturel」について整理した。カルカーニョが現実主義者であり反乱を起こさない方が良いとする慎重論を唱えるのに対し、フィエスク伯に傾倒する理想主義者のヴェリナは個人的な利益に留まらず、公益のために反乱を起こし、暴君ドリアを打ち倒すべきだと主張した。いずれにせよ、議論の出発点は生まれの高貴さや生得的な地位であり、生まれが行動を決定するという特徴が見られる。

フィエスク伯はほぼ全面的にヴェリナの立場を採用し、反ドリアとして武力蜂起する方向に突き進んでいく。その進路を決定づけたのは強い名誉欲を抱く「生来の性質」であり、反乱の実行段階においてもその性質は重視されているが、この特徴はレ枢機卿の作品全体に見られるものではない。

『ジャン＝ルイ・ド・フィエスク伯爵の陰謀』の約 10 年後に執筆された 7 編のマザリナードにおいて、今度は内戦の当事者としての自己を、第三者に語らせる形式で理想的人物として描いている。マザリナードにおいても、「生来の naturel/le」という形容詞や「自然本性 nature」「生来の性格 naturel」という語は登場するものの、フィエスク伯ほど頻度は高くなく[42]、レ枢機卿の方針において重要な役割を果たすことはない。むしろフィエスク伯に見られたような「生来の性格 naturel に合致したものに従わずにはいられない[43]」という特徴は、マザリナード全体における非難の対象であるコンデ親王に見られる「傾向 inclination」である。

この違いが『フィエスク伯』を執筆したと考えられる 10 代という年齢が、「勇気の最も高貴な動きを行う血の熱気が、偉大なものだけを鼓舞する年頃[44]」であるという個人的な要因によるものなのか、あるいはル・シッド論争といった美学の貴族社会全体における変化のような外的要因によるものなのか、いずれの影響がより強いのか断定することは困難である。いずれにせよ、フィエスク伯という理想的人物に反映された 1630 年代当時のレ枢機卿の英雄観、特に「生来の性質」に従う行動を賛美する傾向を明らかにしたことは、本作に続くパンフレ、そして『メモワール』を読み解く上での指標となりうるだろう。

（博士後期課程在学中・日本学術振興会特別研究員）

42）『フィエスク伯』とマザリナード 7 編とは、総語数について前者が 18977 語、後者が 20051 語と非常に近く、単純な頻度数で比較することができる。
43）*OC*, *Les Intêrets du temps*, tome VII, p. 619-620.
44）*OC*, *La Conjuration*, tome VII, p. 140.